

# 小学校教員の体育科表現運動領域における意識調査

## —大学講義との関係性に着目して—

横木花音（横浜国立大学）

### 1. 研究目的

本研究では、小学校教員の表現運動に対する意識と実態及び教員養成系大学におけるダンス授業の効果明らかにすることを目的とする。また、両者の関係を検討していく。

### 2. 研究概要

#### 研究Ⅰ 教員向け調査 概要

対象：神奈川県内全6校73名の小学校教員

実施時期：2020年10月下旬～12月上旬

#### 研究Ⅱ 大学ダンス授業（全15時間）概要

対象：教育学部保健体育専門領域25名の学生

授業実施：2020年10月31日～11月14日

質問項目は、表現運動の指導の困難さについての調査（寺山，2007）より、『「表現運動」の授業を行う際、困っていることはありますか』の自由記述回答の中に複数見られる要素を参考に決定した。なお、分析は  $t$  検定、一元配置分散分析、相関分析を用いた。

### 3. 結果と考察

#### 1) 表現運動に対する不安要素

研究Ⅰ、Ⅱにおいて相関分析を行なった。教員と大学生は共に、恥ずかしがる子の指導、テーマ設定、評価に不安を感じていた。大学生はダンス授業を経て、表現運動の楽しさ、価値、自己の成長を実感することで、先述の不安が解消されていた。

#### 2) 運動会以外での表現運動の実施

相関分析の結果、「運動会以外で表現運動を行なっている」教員は「表現領域を意識して実践」し、「即興的な表現力」、「受容的な姿勢」を意識していた。一方、「表現運動を運動会の演目指導としている」教員は、同じ項目で負の相関がみられ、「教員向け講習で十分に学ぶことができた」と考えていた。以上より、運動会以外の表現運動に取り組む教員は「良質の体育」の

実践者であると考えられる。他方で、現場での表現運動講習の多くは運動会に向けた画一的な演目指導のための研修である可能性が伺える。

#### 3) 本人のダンス経験との関係

本人のダンス経験の有無に関わらず、授業でのダンス実践が豊富な教員ほど「良質の体育」を意識していた。また、20代教員が他の年代と比較して大学で十分に表現運動を学ぶことができていたとわかった。

研究Ⅱの相関分析より、中高のダンスの授業を楽しんでいた学生ほど大学の授業に充実感を感じていたことから、平成22年度の中学校ダンス必修化時点で生徒であった20代教員は、中学、高校、大学の授業でダンスに深く関わっていたと考えられる。

### 4. 結論

本研究では、(1)高校までの体育授業で楽しくダンスを学び、(2)大学で表現運動の指導イメージを掴み、(3)教員として価値理解を踏まえ授業の実施経験を積むことで、良質の表現運動の実践者が育成されると考察された。さらに、良質なダンスを学んだ子どもたちが教員に憧れ、教員養成系大学に進学し、質の高い表現運動実践者となっていく円環（図1）は、良質な表現運動実践者の持続可能な養成と育成に繋がると考えられる。

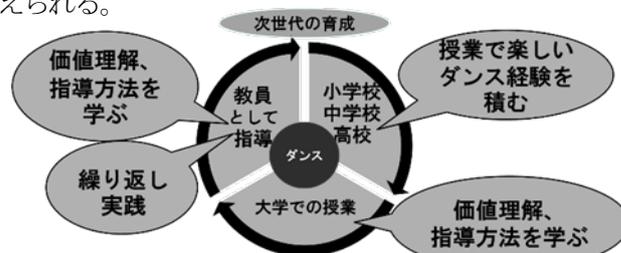


図1 表現運動領域における教員養成課程サイクル

### 5. 主な参考文献

寺山由美（2007）「表現運動」を指導する際の困難さについて 千葉大学教育学部研究紀要，55:179-185。